

## 宿場町寸話

### 4. 枚方宿の防衛的構造 (1)

2024年2月16日  
堀家 啓男

宿場には、幕府役人の公用や各地の大名が参勤交代のときに休泊する本陣や公用荷物の中継所である伝馬施設が備えられています。本陣は殿様が軍旅の途中に寝泊りする簡易な城のようなものともいえます。城下町では城を囲んで、これを守るための道路等の街づくりが行われます。とすれば宿場町でも本陣に泊まる殿様を守る対策があったのではないのでしょうか。枚方宿についてみてみます。

#### (1) 枚方宿設置の時期と設置目的

慶長五年(1600)関ヶ原の戦いで覇権を握った徳川家康は、早くも同六年(1601)に品川宿をはじめとして東海道の宿駅を設置し、宿継ぎ伝馬を常備させ、そのかわりに一定の地子免除を行い、人馬による公用荷物や書状の輸送体制、休泊設備などの整備を進めました。宿場町とはそもそも人馬継ぎ立てを任務とする施設を中心とする町だったのです。

枚方宿はいつ設置されたのでしょうか。これを明らかにする資料がないようです。「東海道枚方宿」(枚方市教育委員会)では、大坂夏の陣の翌年、元和二年(1615)に守口宿が設置されていることから、このころから寛永初年(1624～五十三次の最後の宿、庄野宿は寛永二年、1625 設置)にかけて設置されたのではないかとしています。その理由として、大坂夏の陣で豊臣家を滅ぼした幕府が攝津、河内、和泉と西国を視野において、大坂の重要性を認識した上で大坂城代や大坂町奉行をおいたのと同様に、京坂間に伝馬制度である四宿を設けたのであろうとしています。また京坂間の領地配置も幕府直轄や、徳川譜代か旗本であることもこれに共通するとしています。そうであるなら、枚方宿は遅くとも守口宿と同じ元和二年頃には設置されていたと考えてみたいと思います。東海道の軍事的要衝、箱根宿は元和四年(1617)に整備されていることや、守口宿の伝馬が当初、人馬共に扱っていたのに大坂に近いということからやがて人足取り扱いのみになったのは、枚方宿が同時期から設置されていたことを間接的にあらわすものと思えます。

#### (2) 宿場の出入り口

枚方宿の西見附(大坂側)では、宿外から宿場の西の出入り口にいたる街道は大きく鍵の手に曲がっており、宿外から見通せないようになっていました。はじめは大坂方の入り口として上壘のようなものがあってはいないのでしょうか。安藤(歌川)広重の「東海道五十三次 赤坂」や同じく「行書東海道 石部」では下部に数段積みのある石垣のある見附の上壘が描かれており、見附に土壘が設けられていたことは十分考えられることです。

枚方宿の東見附(京都側)では天の川の袂で往還筋は、大きく鍵の手に左折し、さらに見附茶屋から宿に入るあたりでも大きく鍵の手に右折し、宿内を見通せないように工夫しています。

つまり、いずれの見附も宿内を見通せない遠見遮断の工夫がされているのです。枚方宿の整備にあたって、四村(岡村・岡新町村・三矢村・泥町村)が宿として指定され、従来の街路を活用しながらも宿内道路としてのいろんな工夫がされたと考えられます。

# 東見附

